

# 自壊する欧米

ガザ危機が問うダブルスタンダード

内藤正典

Naito Masanori

三牧聖子

Mimaki Seiko



集英社  
新書

1211

A

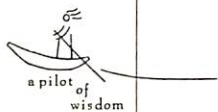
5319  
36

一〇二三年二〇月七日、パレスチナ・ガザのイスラム主義勢力ハマスが、占領を強いるイスラエルに対して大規模な攻撃を行った。イスラエルは直ちに反撃を開始。しかし、その「自衛」の攻撃は一般市民を巻き込むジェノサイド(大量虐殺)となり、女性、子どもを問わない数万の犠牲を生み出している。

「自由・平等・博愛」そして人権を謳いながら、イスラエルへの支援をやめず、民族浄化を黙認し、イスラエル批判を封じる欧米のダブルスタンダードを、中東、欧州移民社会の専門家とアメリカ政治、外交の専門家が告発。世界秩序の行方とあるべき日本の立ち位置について議論する。

自壊する欧米  
ガザ危機が問うダブルスタンダード

内藤正典 Naito Masanori  
三牧聖子 Mimaki Seiko



横浜市立大学学術情報センター

007298860

受入

一一〇二三年二〇月七日、パレスチナ・ガザのイスラム主義勢力ハマスが、占領を強いるイスラエルに対して大規模な攻撃を行った。イスラエルは直ちに反撃を用

## 10・7が可視化した暴力の世界

内藤正典

2023年10月7日、パレスチナのガザ地区を支配するイスラム主義勢力ハマスとイスラム・ジハード勢力が、イスラエルに対して大規模なロケット攻撃を行なった。

5000発（ハマス主張）にのぼるロケット弾がイスラエルの広い範囲に向けて発射された。それだけではない。ハマスの攻撃は極めて周到に準備され、巧みにコーディネートされていた。パラグライダーで戦闘員がイスラエル領内に侵入、ブルドーザーでイスラエルとの間のフェンスを壊して、ガザの若者たちがイスラエル領に入り、いくつかの町で警察署を一時制圧した。よほど計画を練った上で作戦全体がコーディネートされていないと実行できるものではない。さらに、イスラエル側の電子監視システムを最初に破壊し、いくつかの境界線を突破してイスラエル側に侵入し、ミュージック・フェスティバルを襲撃、軍の拠点を攻撃している。その様子を上空からドローンで撮影し、それをSNSにアップして公開した。

これは1948年のイスラエル建国以来、パレスチナから見ればイスラエルによる占領が始

まっけて以来、初めての大規模な攻撃となった。

イスラエルはこの攻撃を察知できなかった。国内諜報ちやうほうを行なうシン・ベト、対外諜報を行なうモサド、それにイスラエル国軍のすべては、なぜハマスの作戦を見逃したのかという疑問が残る。これについては10月9日にタイムズ・オブ・イスラエル紙が注目すべき記事を配信した。エジプト情報局長官が10日前にベンヤミン・ネタニヤフ首相に電話して「ガザで想定外の一大事が起きるかもしれない」と伝えたが、ネタニヤフ首相は情報を無視したというのである。関連する情報としては、イスラエルの諜報機関は、北のレバノンからのヒズボラの攻撃、パレスチナのヨルダン川西岸地区での破壊活動に注目しており、ガザに注目していなかったとも指摘されている。だが、いずれにしても明確なのは、ユダヤ人にとってホロコースト（ユダヤ人の大量虐殺）以来最悪の人的被害を出している点で、この攻撃を許したのはネタニヤフ政権の大失態であるということだ。

かくしてネタニヤフは、ただちにイスラエルが戦争に突入したと宣言し、ハマスに対する作戦名を「鉄の剣」として、その日の夜にガザへの大規模な空爆を開始した。そしてガザに対して国防相が電気、水道、食糧、燃料の供給をすべて停止すると宣言。失態を覆い隠すには、全面的な戦争しかないと判断したのである。こうしてガザ市民をも巻き込み人道危機と非難されるまでに至る凄惨な攻撃が今も続いている。

しかし、どれだけ電気やインターネットを遮断しても、ガザの建物を空爆で破壊する様子や、おびただしい犠牲者、中でも子ども死体の映像は世界に配信されている。そのため、目を追って、イスラエルの反撃に対する国際社会の批判も高まった。イスラエルの報復が長引くほど、イスラエルの攻撃による犠牲者の姿が拡散されていくから、これはネタニヤフ政権にとって国際的な評価を下げる結果をもたらしている。同時に、イスラエル側に50年前の第四次中東戦争以来の甚大な被害をもたらした首相として、ネタニヤフの政治生命はいずれ断たれるだろう。だが、それまでにどれだけ犠牲をもたらすのかについては重大な懸念がある。

本書は、トルコを中心とした中東研究とヨーロッパのムスリム移民研究を専門とする内藤と、アメリカ政治外交研究を専門とする三牧聖子氏による共著である。序章で中東と主にヨーロッパにおけるこの事件のインパクトを内藤が考察し、第1章と第2章の対談で、この欧米のダブルスタンダード（二重基準）の問題を掘り下げ、今後の世界秩序の行方について多角的な分析を加えていく。終章は三牧氏によるイスラエル訴追をする動き、アメリカの動向などについての論考という構成となっている。

三牧氏は、気鋭の国際政治学者である。アメリカは、言うまでもなくイスラエルの最大の支援国であり、イスラエルの自衛権を最大限に認め、ガザ市民の犠牲者を増やした当事者でもあ



一一〇二三年一〇月七日、パレスチナ・ガザのイスラム主義勢力ハマスが、占領を強いるイスラエルに対し

（一）見聞、トマス、ヒム、ト。トマス、ヒム、ト。トマス、ヒム、ト。

る。今のアメリカを考えるにあたって、親米か反米かというような古臭い感覚に囚<sup>とら</sup>われたら物事は見えない。実際、トランプ政権からバイデン政権になっても、自由と民主主義の大国だったはずのアメリカがなぜこんなことをするのか、というシーンを目の当たりにすることが著しく増えている。そのあたりのリアリティをアメリカ政治・外交の専門家と語り合う機会を得たのは大変に刺激的で有意義だった。

ガザの現状は2023年10月7日から5ヶ月の間に劇的に悪化した。そのため、書き加えるべき内容は日に日に増えていった。2024年3月上旬までの状況であることをお断りしておく。



イスラエル建国から始まったナクバ(大災厄)。1948年10月、シオニストによる虐殺と強制移住にさらされ、逃れるパレスチナ人。パレスチナ危機は10・7から始まったわけではない

写真：Bridgeman Images/アフロ

一〇二三年一〇月七日、パレスチナ・ガザのイスラム主義勢力ハマスが、占領を強いるイスラエルに対して大規模な攻撃を行った。イスラエルのまじうこえと見

10・7が可視化した暴力の世界

内藤正典

3

## 序章 イスラエル・ハマスの戦争という世界の亀裂

内藤正典

13

ガザとハマスの何がテロか？ 誰がテロリストか？

パレスチナ問題での暴力の応酬と「テロ」／パレスチナ問題とトルコ／

エルドアン政権にとってパレスチナ問題とは何か？／ヨーロッパ社会の分裂／

ガザから世界に暴力の連鎖を広げてはならない／

イスラム圏諸国は早く手を打つ必要がある／テロ以上に危険なのは道理の破綻だ／

ダブルスタンダードがリスクを拡大する

## 第1章 対談 欧米のダブルスタンダードを考える

39

イスラエルはパレスチナに勝てるのか？／繰り返される、開戦と攻撃のための虚偽  
ジャーナリストへの攻撃／ハマスを「悪魔化」する米メディア／

戦争を後押しするホワイト・フェミニズム／

「ハマスのレイブを非難しない人はフェミニストではない」／

「命を奪わない」のがフェミニズムの根幹／「9・11」というマジックワード／

全世界の問題にならなかったガザ問題／「テロとの戦い」というダブルスタンダード／

民間人の犠牲は「付随的」？／

反ジェノサイドが「反ユダヤ」にされる欧米の現状／拡大解釈される付随的被害／

イスラムの戦争法／アメリカとイスラエルの共犯関係／

イスラエル支持を表明した欧州委員長／

安定期に入っていた中東世界で取り残されたガザ／

極右が反ユダヤ主義を批判するフランス／

ドイツは「反ユダヤ主義」を克服できたか／オランダはリベラルによる反イスラム／

歴史的にユダヤ人を抑圧してきた西欧の偽善／キリスト教ヨーロッパの過去／

ヨーロッパのたちの悪さ／克服されていないレイシズム／バイデンとシオニズム／

建国神話を共有するアメリカとイスラエル／

反マイノリティが「ユダヤ人を守れ」という奇妙さ／

「民主化神話」が正当化するジェノサイド／ZARAの広告に描かれたパレスチナ／

「パレスチナに自由を」と言ったグレッタさんに起きたこと

一〇二三年一〇月七日、パレスチナ・ガザのイスラム主義勢力ハマスが、占領を強いるイスラエルに対し

「七見莫よ女終と三つこと。イムラニレは直つこと終と聞

## 第2章 対談 世界秩序の行方

155

反ユダヤ主義の変奏としての反イスラム主義／

民主主義のための殺戮の歴史を直視できない欧米／

反転するホロコースト体験／アメリカの空疎なサウジアラビア批判／

ウクライナ戦争へのトルコの対応／

「そこにいる権利があるパレスチナ人」という大前提／

「過去に何があったのか？」という問い直しの重要性／

トランプとバイデンはどちらがましか／第三党を望むアメリカ人／

欧米が不問に付すイスラエルの核問題／巻き添えを回避するイラン／

「核なき世界」の理想を自ら切り下げた日本／欧米崇拜から脱却できない日本／

イスラエルと共に世界の少数派になるアメリカ／

誰がイスラエルの戦争犯罪を止められるのか？／

ロシア・ウクライナをめぐる言説／

「ニュートラルな日本」のイメージを生かせるか／

「インフルエンサー」フランシスコ教皇／イスラエル・ロビーの影響力／

多様化するイスラエル・ロビー／不寛容が広がるアメリカに抗う若者たち／

ブラック・ライブズ・マター運動からパレスチニアン・ライブズ・マター運動へ／

旧東ドイツ地域の反ムスリム／トルコを冷遇するEUの限界／

「人殺しをしない」を民主主義の指標に／

ガザから見えるフェミニズムの課題／安倍外交とイスラエル／

トルコ外交と日本外交／日本は欧米とイスラム圏をつなぐ役目を果たせるか？

## 終章 リベラルが崩壊する時代のモラル・コンパスを求めて

三牧聖子 — 251

イスラエルのジェノサイドを問う裁判／ジェノサイドを否定するアメリカ／

バイデンの責任／ジェノサイドに抗するもう一つのアメリカ／

人道危機の悪化に加担する欧米、そして日本／

新たなモラル・コンパスを求めて



# 序章

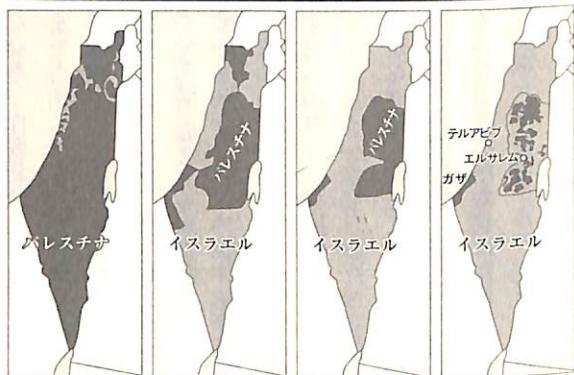
## イスラエル・ハマスの戦争という世界の亀裂

内藤正典



写真：ロイター/アフロ

パレスチナとイスラエル テリトリーの変遷



1946 英委任統治時代  
1947 国連分割決議  
1948-67 イスラエル建国から第3次中東戦争  
2012 テルアビブ、エルサレム、ガザ



写真：ロイター/アフロ

\*第1章および第2章は、2023年12月22日の対談に適宜最新情報を補足したものである。

一一〇二三年一〇月七日、パレスチナ・ガザのイスラム主義勢力ハマスが、占領を強いるイスラエルに対し